

しからず、飯田中學校松永勇君の統制の下に、こゝに新に題記の菊版三二九頁の尨大な書冊が出版された、第一章機業では機業が上郷、飯沼に集中せる理由をのべ第二章染物、第三章元結、第四章水引、第五章傘、第六章製糸、第七章凍豆腐、第八章コンニャク、第九章椎茸、第十章市田柿、第十一章其他の果樹、第十二章鯉の各章いづれも親切丁寧な歴史的地理的説明がある、思ふに所謂非常時の今日、農村の工業化が世界先進國の競ふて行ふ所となり、土地の狭い人口の多い日本での農村副業といふことが自力更生の第一要義として注目さるゝ今日、この書は恐らく多くの暗示を全國の農村特に山村に與へるであらうことを信じて、廣く世に讀まれんことを望むものである。

○江戸と大阪

幸田成友著 富山房發行 定價二圓五十錢

本書は幸田博士が東大商科で講義されたものによつて新に稿をつくられたものである、經濟史上の研究であるが、江戸及大阪の歴史地理を學ぶ人にとつて極めて有益な暗示にとむ名著である。(藤田)

○露西亞縱橫記

昇曙夢著 章華社 定價一圓八十錢

文學家の見た四六版四百頁の手頃なロシア記である、ソウイェト聯邦の地理をしる書物としてはいかゞかと考へられるけれども、ロシア人、ロシアの風物、ロシア人の趣味など、いつたものは讀んでも面白い、北方大陸の夏の夜や秋の野原などと思ひもよらない風景が描寫されてゐる。

正直に云ふとソウイェト聯邦の新興の國情は、多くは宣傳的であつてハツキリわからない、しかしたとへ宣傳であつても、その宣傳の中にはいかにも努力してゐる傾向そのものは明になるから、事實の如何はともかく、かうした施設があるといふことだけは他山の石として知らねばならない。

本書の後の方にも新しいソウイェトの努力の様子のわかるところがある、一讀して面白い且つよい本であると信じる。

(藤田)

雜報

○神戸市須磨區多井畑化石層

多井畑の東北、奥妙

法寺方面に通ずる路傍、厄除八幡宮より阪路を北方の谷底に下り、次の阪路に移らんとする處に約二尺五寸の凝灰質頁岩、その下に約五尺の妙岩層露出す、走向は北八〇度西、傾斜は西南に一〇度内外なり、この凝灰質頁岩層の下底部約一尺、砂岩層の上部約二尺の間には介化石を多く保有す、頁岩中の化石は石灰分を殘存するものもあるも、大部分は溶解し去り、砂岩中には殆どカストのみにして保存は良好ならず、但し化石は夥しきを以て表面の風化せる部を取り去らば保存よき化石を採集するを得ん。

Trapezium japonicum, *Ostrea* sp., *Pitar* sp.,

Corbicula (?) sp., *Cyclina* (?) sp., *Cymatium* (?) sp.,

以上六種は黒田氏の検査によるものなり、多井畑小學校の西北約五百米を隔つる地にも介層あり、中村教授の採集にかゝる試料につき前原氏は次の三種を記載せり。(京大卒業論文)

Barbatia sp., *Ostrea* sp., *Cyclina* (?) sp.,

これ等の化石類は瀕海層の介類にして、本層の上位とせらるゝ地層中に於ては多くの植物化石を埋藏し、中新世とせらるる然るに *Trapezium japonicum* 其他の介化石群は新らしき感あり、却つて現今の舞子附近のフオーナに近似するが如しといふ。(上治)

○濱江省寧安縣

もとは吉林省に屬して其中央部をしめてゐたが現在では濱江省の東方要地となつた、縣の四方には

山岳丘陵がありその東南に滿洲第一の大湖鏡泊湖がある、この湖水からは牡丹江が出て西北にながれ、勃利、方正、兩縣の境となつて依蘭縣に入り松花江に合する。その河畔右岸には、有名な東京城即ち渤海國の國都勿汗城があつた處であるが、さうした一千年の過去は今日では夢の如くであつて一時は無人の郷となり、清朝の末から支那人や鮮人の移住した所である。牡丹江の上流に鏡泊湖が出来たのは石頭甸子附近に於ける熔岩の噴出がこれをせきとめた結果であつて、この熔岩層を横ぎる水流は、いづれも瀑布であるが、その湖面と東京城平地との落差は二百尺に達する。東京城以北、牡丹江の兩岸は坦々たる平原で土地肥沃なること北滿第一の稱がある。廣さ南北十里東西五里、沖積平原で火山土を混する、その

肥沃さは間島の比でない、普通鮮農が水田を開くに當り初年度は耕耘せず除草を兼ねてホミ打だけで撒播しても、猶且つ响當り十五石以上の収がとれるといはれる、中心地としては東京城、寧安、新安鎮、及牡丹江、海林などの都會で、その中心地の周圍に農耕地が出来てゐる。水田は主として鮮農の經營地であるが、可耕地は現在大約三四〇萬响であるといはれる、响は十畝で、一畝は百八十歩である。

水田に於ける開墾當初より年次別生産左の如し。

△海林地方(東支鐵道の一驛)

開墾第一年	一响當収	一七、八四
第二年	同	二二、三〇
第三年	同	二四、五三
第四年	同	二二、三〇
第五年以後十年間	この收量を持續する。	

△東京城地方

開墾第一年	一响當収	二二、三〇
第二年	同	二〇、〇七
第三年	同	二〇、〇七
第四年	同	二〇、〇七
第五年	同	二〇、〇七
第六年	同	一七、八四

普通五年目には之を放棄して他に移動する、これは鮮人のやうな移動性遊耕民のすること、全く原始粗放農業であるが

米の外に大豆や粟や、高粱、玉蜀黍等がつくられる、牡丹江の西岸には猶密林が残つてゐるが、猶三百五十七萬陌米耕地が残存してゐるといはれる。北滿材と稱するものゝ中でも鏡泊湖附近の森林は最も良材であるから、之を伐採して段々と可耕地が増加する見込である。

氣候は年平均、二、四度で五月中旬から上昇し八月上旬に最高となりそれから後急に下る、最低零下四十三度、降水量は五二八、五耗であるから、氣温からみて小麦地帯といへる滿洲人の人口密度が少いので鮮人の移住好適地と目され、現在ではその土地購入者も次第に増加しつゝあり、古い鮮人は全く支那化して寧安附近に一千四百戸もゐる、新しい鮮人は大正三年に移住した醫師金演元を草分けとし昭和八年に六千七百人に達した、幸にこの地方での滿人は經濟状態が年々赤字であるのに、鮮人は若干の剩餘金を出してゐる。これは其生活程度が低いからで、家族六人を有する鮮農の一戸當一ヶ年の總収入は約三百圓に過ぎないのをみてもその様子がわかる、但し今日ではこの地域を通じて延吉から鐵道がチャムスに通じたから匪賊の掃蕩も容易になり、いよゝ鮮人の王道樂土となる日が近づいてきたといへる。

○朝鮮の鑛業

昭和八年末の鑛區三千三百四十三その面積四百四十一方里、その六割四分は内地人千二百二區は朝鮮人、外國人の特許鑛區は雲山及び遼安の二區のみである、平安北道の五百六十鑛區を最高とし平南、忠南、咸南、江原之に

つぎいづれも三百二、三十區咸北、黄海、忠北、慶北、京畿慶南、全北、全南の順で全南は九十五區である、このうち稼行鑛區は一千四百七十一で、四割四分しかない、金銀鑛一千八十一、砂金九十、石炭七十七、鐵鑛三十二、黑鉛の三十、其他本年新に着手したものの亜鉛の十六、砒鑛の三、銅及鉛の各一、硫化鐵鑛、タングステン、水鉛、黑鉛、高嶺土、鑽石明礬石、螢石、石棉等の各種の鑛區いづれも活氣を呈した。

昭和八年の鑛産價額は四千八百三十萬圓で前年よりも千四百五十萬圓の増加である。
内地人は三千五百九十萬圓(七割五分)鮮人七百八十一萬圓(一割六分)外人四百五十六萬圓(九分)で鮮人は四百萬圓十割を増した。

重晶石は多少産額を減少し水銀は全く産出を見ない外他の鑛物はいづれも増産で金は十一匁五百匁に達しタングステンは百五十二匁、水鉛は百五匁で、いづれも増産がいちぢるしい。

地方別にして黄海と平南、北三道最も多く三千四百四十萬圓に達し、平安北道の金、平南の無煙炭、黄海道の鐵といふ三つは依然としてこの方面の首席をしめる。

○朝鮮長津江の水力發電

朝鮮には二百四十餘萬キロワットの電力がある中で有名なのは鴨綠江の支流赴戰江の流域を堰止め周回十二、三里の湖水となし、其水を七里のトンネルで日本海方面に導き、落差三千餘尺で十七、八萬キロワ

ツトの發電をなせる興南水力電氣社は更らにこれに隣接する長津江の水を利用して十餘萬キロワットを得て窒素肥料株式會社に供給する計畫を立てた、現在興南には窒素工場の外金製鍊及び魚油硬化工場があるが長津江の水力利用が出来ればマグネサイトを原料とするマグネシウム製造と、數十萬噸の滿洲大豆加工の二工場が出来る筈である。

長津江では赴戰江と同じく分水嶺をこえて城川江の支流黒林江に落するもので、第一堰堤は咸南道長津郡葛田里(第二堰堤は第一の下流秋物里に設け其水は唧筒で第一貯水池へ揚水する)に造られ、高さ五三米のコンクリート堰堤で、毎秒時四二立方米(約千五百十個の水を二五、七〇〇米、即ち約六里半の水路でトンネルとなし咸州郡眞興里の城川江支流黒林江に

落水し一四四、〇〇〇キロワットの水力發電を爲すが第一發電所で、以下放水した水を第二、第三、第四と繰返して使用合計三十一萬六千五百キロワットの電力を得る計算である。目下第一發電所から最大一〇八、〇〇〇キロワットを發生の目標で進行中、其事業者は長津江水電株式會社である、豫算二千四百萬圓といふ。

出力
 第一發電所 一四四、〇〇〇 眞興里
 第二發電所 九八、七〇〇 同水洞
 第三發電所 四六、五〇〇 同河大里
 第四發電所 二七、三〇〇 同松堂里
 出来上れば三十二萬キロの半分送窒素肥料會社へ供給し、殘半分を平壤方面に輸送して一般に供給するといふ事である。

○享保以後の地理關係出版書目

大阪 (十二)

地球儀(書圖銅鑄張附緯度尺は

大周圍曲尺二尺一寸五分 水口龍之助

小周圍曲尺一尺九寸五分)

以上二種但原書(ルマンベルコース氏(英國)一千八百七十一年刊行地圖に依る

赤志忠七

明治六年十一月二十六日

方今三府往來

以前「三府往來」と題せしものを此度改題發行願出

山本與助

大野木市兵衛

明治六年十月二十六日

開大日本往來 後篇 半紙本三冊 島有三

新改正大日本輿地細圖鋼板一枚 水口龍之助

〔附記〕本書板行出願の文中には「右の圖は五畿七道其他北海道琉球府縣所燈明臺等舊圖の遺漏を考正し官國幣社山陵府

縣概表國産物鑛山等を記入仕候銅板書にて」と書添へあり

天保十三年壬寅五月以後嘉永四年辛亥十二月に至るものか、大阪書林仲間も亦一時解散せしものとすれば、此の間會所なき

右は天保年中諸仲間御差止め御趣意中に屬したるものか、大阪書林仲間も亦一時解散せしものとすれば、此の間會所なき

有様なれば各自直接出版者より開板届出なしぬたるによるべし (完)

森本多助

吉田善藏

明治六年十一月六日

明治六年十二月六日